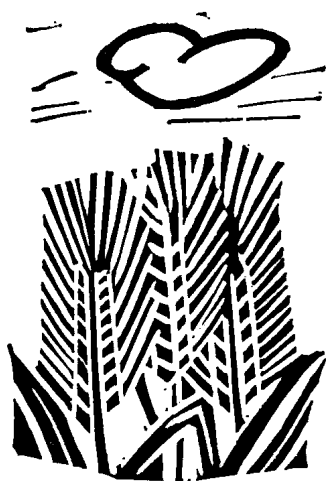


高空10000mの かなたで

香川 茂・作 新井信義・絵



高空二〇、〇〇〇メートルの
かなたで



香川 茂作／新井信義絵

まえがき

大きな花たばをいくつもかかえて、マリヤナ群島へ飛ぶ飛行機に乘ります。
小笠原諸島の南、硫黄島いおうとうの上空で、まず、一つの花たばを、黒潮の海においてあげたいのです。

次に、テナン、サイパン、グアムの順に、私は、私自身の手で、花たばを海にささげたい。
たぶん、そんなこと、だめでしょうね。

機長さんに、特別に頼んでみても、やっぱりだめでしょうね。

でも、いいんです。私の気持ちだけは、きっと、南の海に眠る戦友の心にも通じるでしょうから。

だから、ぜひ、心にいっぱい花たばを抱いて、私は、いつか、かならず、南方飛行ななほうひこうに旅立つつもりです。

そして、「やあ」「やあ」と、海の旧友きゅうゆうたちと語りあってくる日をたのしみにしています。
なにしろ、別れてから、もう四十年ちかくも年月が流れているものですから、きっと思い出話
もいっぱい、いっぱい、とても一日や二日では語りつくせないことでしょう。

この物語は、別れたくないのに別れていった旧友きゅうゆうたちのことを書いたものです。

みんな、いさぎよく、エンジンの音を高鳴らせて、南の海に向かって飛んでいき、二度と帰
ってこなかった若ものたちのこと。ぼろぼろ涙をおとしながら書きました。ごめん、ごめんと
あやまりながら書きました。

カミカゼ特攻隊とっこうたいのこと、聞いてるでしょう。特攻隊とっこうたいといえバカミカゼですものね。

でも、私が、ここに書いたのは、同じ特攻隊の話でも、カミカゼのことではありません。カミカゼだけが特攻隊ではなかったことを、ぜひ知ってもらいたくて書きました。そうでなければ、私は南の海へ、みんなに会いに行く顔がありません。

魚雷も機関砲も、いっさい武器弾薬を持たない特攻隊の飛行機と飛行機乗りたちの話が、私のこの物語なのです。

そんな特攻隊なんて、あったのかなと、目を丸くして、うたがいたくなることでしよう。でも、ほんとうなのですから。ほんとうだからこそ、生き残った証人のひとりとして、私はペンを持ったのです。

昭和二十年（一九四五年）、千葉県八街飛行場に、独立偵察飛行隊という、小さな特攻隊がありました。

当時二十五歳だった私は、そこで航空写真隊長をしていたのです。

飛行機は、高速を誇る百式司令部偵察機という、操縦者と偵察者との二人乗りでした。自動航空写真機を備えて、一万メートルの高空から、忍びこんで敵の航空基地や陣地を撮影してくるのが任務でした。

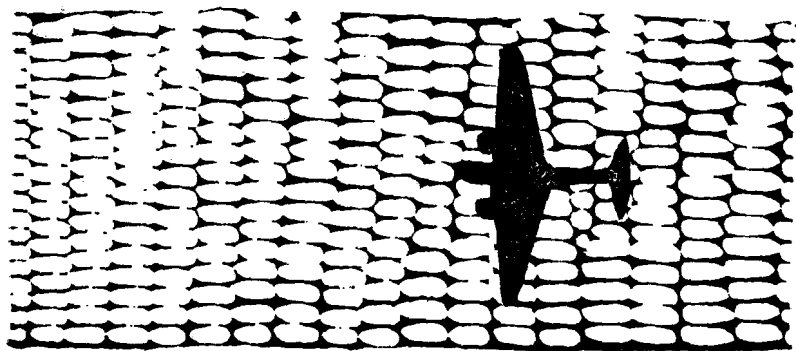
八街飛行隊は、もっとも危険なというよりは、ほとんど不可能に近いマリヤナ基地の偵察飛行を命ぜられたのです。れいの日本の本土をうちのめしていたB29の基地のあった、テナヤン、サイパン、グアムの米軍基地をです。

さあ、前おきは、このくらいにしておきましょう。ひとつ、じっくりと読んでみてください。

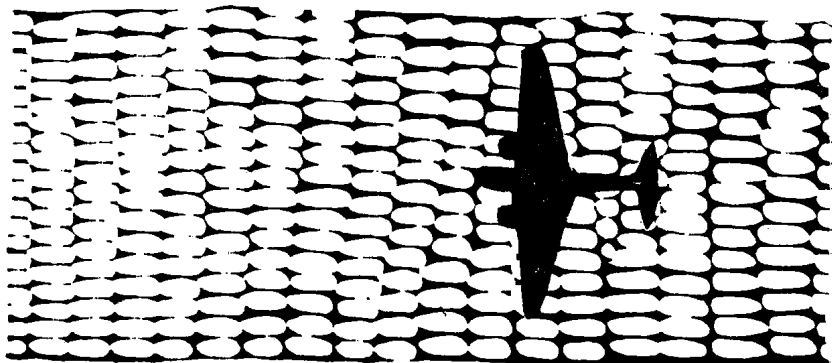
作者

十	九	八	七	六	五	四	三	二	一
がまん、がまん	どじょうのかばやき	胴体着陸機あり どうたいちやくりくき	小さな特攻隊 とつこうたい	実砲と空砲 じつぽう くうぽう	海ぼうずと少年	東京からの灰 は	マリヤナ偵察飛行 ていさつひこう	いのちあるかぎり	でこぼこ道で まえがき

100	92	80	69	60	48	40	29	20	7	2
-----	----	----	----	----	----	----	----	----	---	---



十一	モンペの人	113
十二	ピーゴロめ、あっちへ行け	123
十三	死ぬときは	134
十四	あしたは飛ぶぞ	145
十五	おとり作戦	153
十六	三機 ^{さんき} 発進 ^{はっしん} ！	166
十七	暗い夜あけ前	171
十八	ダンチヨネ ^{ぶし} 節	179
十九	死んでたまるか	192
二十	てるてるぼうず	204
	あとがき	220



黒潮よ

フィリッピンの海から

東シナ海に流れ

トカラ海峡かいきょうを通り

日本の南岸にやってくるおまえ

くろく、あおく、むらさきいろの

あったかいおまえ

たっぷたっぷと身をくねらせ

だまりこくって流れていくおまえ

ほんとうは何でも知ってるくせにさ

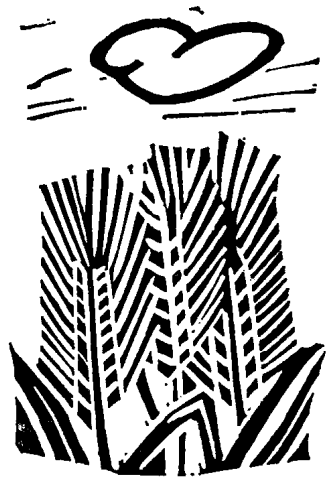
ねえ、ほら

一九四五年のあの話をさ

もう一度みんなに

おねがいだから

きかせておくれ――



一でこぼこ道で

毎年のことなんだが、ことしも、なんきん豆の畑は、丘のすそから中腹ちゆうぶくにかけて、黄色いちようちように似た花をいっぱい咲かせてひろがっていた。

丘の畑だけではない。あっちにもこっちにも、なんきん豆の畑が、わがもの顔に地面せんにを占領せんりょうしていた。

なんきん豆の畑にとりかこまれたようなかっこうで、ちっちゃな町があった。町の古ぼけた瓦屋根かわらちにはペンペン草が生えていた。八街やちまたという名の町だった。

国鉄の駅があつて、一日に何本かの上り下りの列車が、蒸気機関車じようきかんしやにひっぱられて通った。列車が通りすぎて、丘のすそをまわって見えなくなるまでのあいだ、町全体がゆれているような、そんな小さな、いなかの町だった。

ところが、その町の北に、びっしりと茂っていた森林が、いつのまにか、まるでドーナツミ

たいに、まんなかをきりひらかれて、飛行場に化けてしまったのだ。

そして、そこに、独立偵察飛行隊がやってきた。

さあ、それからはいけない。朝っぱらからブンブン　ゴーゴーとエンジンの音がうなり、静かだったいな町は、いっぺんにさわがしい町になってしまった。

さわがしくなっただけじゃない。ちやうどこぼれたインクに吸いとり紙をあてたみたいに、町の人たちが、森林の中にできた、そのいかにも秘密めいた飛行場へ吸いとられていったのだ。

土方になって、陸軍航空隊から日当をもらう年寄りの男女、およめにいくあてがないままに女子挺身隊員になるむすめさんたち。（女子挺身隊というのは、軍関係につとめて、事務を手伝ったり、兵器の製造や修理しごとをする少女たちのこと）

それから赤紙がきた。青年はとつくに兵隊にとられていたので、売れ残りのようなおっさんたちに赤紙がきた。

赤紙は、こわい紙だ。軍隊への召集令状である。おまえは、何月何日の何時までに、どこその部隊へこい、という命令書である。この赤い一枚の紙は、おそろしい力を持っていた。絶対に、いやだとは言えないのである。いやだと言ったり逃げたりしたら刑務所行きである。

町の写真屋の西条さんと、すぐ近所の自転車屋の峰さんのところにも、町役場から赤紙がとどけられた。

ふたりとも、そろそろ頭のてっぺんがうすくなりかけていた。それが、赤紙で、飛行隊に入隊させられたのだ。

ふたりが配属されたのは、飛行場の西南にある檜林に展開している航空写真隊であった。

「どうせ、男という男は、みんな兵隊にとられるご時世だから、かくごはしておった。フィリップンの方へ持っていかれようが、ソ連の国境近くへ吹つとばされようが、もんくは言えないのだから、こうして自分の町はずれにある兵舎に住めるんだもの、まあまあ、ありがたいと思つてがまんしなくちゃ。」

ふたりとも、そんなことをぶつぶつ言いながら、おかみさんと子どもに別れて入隊したのである。

ちびで、いつもおどおどしている西条さん、ツルのようにやせっぽちで、首の長い峰さんが、だぶだぶの軍服をきせられたかっこうは、こっけいで、ぜんぜんしまらなかった。それだけにすごく気の毒な感じで、悲しかった。

ふつうならば、兵隊になったのだから、腰には剣、肩には銃というわけだが、ふたりとも銃はもちろんのこと、ゴボ剣さえも配給されなかった。（ゴボ剣は、兵隊たちが腰に吊るす短剣のことである。かたちが、あのゴボウに似ていたから、そう呼んだ。）

西条さんや峰さんばかりではない。町の中年のおっさんたちは、ほじくり出されて、航空通

信隊や整備隊の補充兵として、この偵察飛行隊に送りこまれた。

モンシロチョウがへらへら飛んでいるのを、西条さんのむすこの、国民学校（小学校のこと）五年生のサイチが追っかけた。

峰さんのむすこのマツオと、マツオの妹のタツ子もいっしょに追っかけた。マツオとサイチは同級生で、タツ子は二年生だ。

サイチはすばやい。マツオたちを引きはなして、へらへらのモンシロチョウにおそいかかった。「やったあ！」

叫んだとたんに、足をすべらせて池に落ちた。池たったて、もとの池じゃない。

つい先だつてのこと——そう、春になって、アメリカの大統領のルーズベルトが、ころっと死んじまったというニュースが伝わり、アメリカとの戦争がすっかり負けいくさになってきていた日本としては、ざま見ろ、これで日本にも運が向いてきたぞなどとさわいでいたころのことだ。東京を爆撃にやってきたB 29の編隊の中の一機が墜落した時にできた大穴に、雨水がたまつたドロ池なんだ。このへんはあか土なもので、ぐちゃぐちゃのねばねばのドロコ池だ。そのどろ水の中へバチャンだから、たまつたもんじゃない。サイチは腰から下が、べったりのどろ人形になつてしまつた。



せつかく、とっつかまえたモンシロチョウも、ぐちゃっとつぶれてどろんこだ。

「こんちきしょう。」

サイチは、それを投げすてたが、べったり手のひらにくっついて離れない。しかたがないので、どろ水でバシャバシャやって落とした。

タツ子が、わんわん泣きだした。

「泣くなってば、こらっ！」

兄のマツオが叱りつけたが、これもうろうろとあわてている。

「くそっ！」

サイチは、やっとはいあがってきた。

サイチは、マツオとタツ子のほうへは見向きもせずに、かけ出した。

麦畑を走りぬけると小川がある。

サイチは小川に、足からとびこんだ。小川は、へそまでの深さだ。つめたい、つめたい。

しゃがんで、首までつかると、どろんこが、みるみるうちにきれいにはがれていく。

べろべろと顔を洗った。洗った顔を上げると、岸のセリの葉っぱ越しにマツオとタツ子の目と会った。サイチがにやっとなめてみると、兄妹も、そろってにやっとなめしをよこした。

「けがしなかったか。」

マツオがきいた。

「だいじょうぶ、おれ、にっぽん男児だもん。」

どんと胸をたたいたつもりが、小川の水をびしゃつとやったので、顔いちめんにしぶきをあびた。

サイチは、そのまま、小川の中で小便をぬいた。それからゆっくりと岸にあがろうとすると、
「ほらよ。」

マツオが右手をさしのべて、ひっぱりあげてくれた。

オオバコのびっしり生えた岸にあがると、サイチは、水から上がった犬がするように、ぶるんとからだをゆさぶった。

「ちべた！」

水玉がはねて、タツ子が首をすくめた。

タツ子は、もう泣いていない。

じつは、「ちようちょ、とってよ。」とせがんだのはタツ子だったのだ。タツ子は、サイチの、小さな、かわいい恋人なんだ。サイチは、おとなになったら、ぐっとおしゃれな洋服を着こんで、タツ子をおよめさんにもらって、西条写真館のあとをつぐつもりだ。だから、タツ子のために、モンシロチョウを追っかけて、どろんこ池に落ちたからといって、ちっともくやしくな

い。小川で洗って、さっぱりして、ずぶぬれになって、くしゃみ一発で、それでいいのだ。

三人は道へ出た。

赤土の道はかわいていて、車の輪っかのあとだらけ。ひどいでこぼこ道。戦車の通ったキャタピラのあとも、くつきりと残っている。

三人とも、はだしだ。靴がないのだ。配給の靴は、もったいなくて、だいじにしまっている。遠足の時に、はいていかなくちやならないからだ。野原であそぶときは、はだしでじゅうぶんなんだ。足のうらが、いつのまにか、軽石みたいに固くなって、砂利ぐらいは踏んづけても痛くない。

むこうから、馬にひかせた荷車がやってきた。

荷車には、手綱をとったほおかむりのじいさんが、ちょこんと乗っている。木の輪っかは鉄板で巻いてあるので、ガタガタと音が高い。

「ドゥ、ドゥ。」

じいさんは、手綱をしぼって車を止めた。やせっぽの黒馬が、フルンと鼻を鳴らした。

「どうした、川に落ちたんか。」

じいさんは、ずぶぬれのサイチに声をかけた。

「B公の穴に落ちたんで、川で洗ったんだよ。さむいよう。」

サイチがあまえて、足ぶみしてふるえてみせた。

「ばかったれめ、そばへ寄るからいかんのじゃ。うちはどこじゃい。」

「町だよ。」

「ンだら、三人とも乗せてやんべ。こんなとこ、うろちよろしとると、いつなんどき、アメコの飛行機にぶつころされるかもしれんど。さ、乗った、乗った。」

三人は、しめしめと、荷台にはいあがった。

「ほんとに、アメリカやろうめ！」

じいさんは、ぽしゃっと手綱たづなをはじいた。

ガタゴトと荷車にぐるまは、キャタピラや車の輪にいためつけられた道をすすみはじめた。黒馬あおは、すこしびっこをひいていた。

「学校は、どうしたい。」

じいさんがきいた。

「休みだよ、学校なんか。」

サイチが答えた。

「ふん、ふん。」

うなずくと、

「学校もたいせつじゃが、いのちのほうなんぼたいせつかもしれない。ほんと、日本がアメリカなんかに負けてたまるもんけ。」

「パチッ」

じいさんが手綱たづなを強くはじいたので、びっこのやせ馬は、あわてていそぎ足になった。荷車にぐるまは、右に左にガタガタゆれた。

「おまえたち、とうちゃんは、どうした。」

「兵隊に行ってるさ。」

サイチが言うと、

「おれんちのとうちゃんもいっしょだ。」

マツオが負けずにつけ加えた。

「そうか、そうか。ふたりとも、とうちゃんいなくても、元気にやらんきゃなんねえぞ。」

じいさんは、目じりにしわをよせてうなずいた。

そのとき、

「ブーッ」

とっても長い大きなおならが一発。

「いまの、だれや。」